パパ、まってるから

東野佳奈子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パパ、まってるから

【Ｎコード】
Ｎ２１５２ＢＡ

【作者名】
東野佳奈子

【あらすじ】
刑事見習いの俺――佐久間貴彦は突然誘拐事件に出くわし、その人質が自分の娘だと知る。自分の娘を助けるためなら金など惜しくない、今すぐ助けにいく、時間さえ待ってくれれば――父親の名誉を賭けたパパ刑事見習いと、誰にも明かせぬ過去を持った犯人との一刻を争う闘いを描いた作品。

第一章　正午までに

それは俺がまだ交番で巡査として働いていた頃の事件だ。まさか自分が駐在している交番に、誘拐犯から電話がかかってくるとは思わなかった。

――あれはいつだったか。秋の入り江といった頃だったかもしれない。珍しく残暑が長引かなかった年だ。俺はいつもと同じように事務机に肘をついて、交番の固定電話が鳴るのを待っていた。事件がおきてほしいわけでもなかったのだが。午前中の俺のパトロールは行ってきた。外を歩く子供達は楽しそうにおしゃべりをしながら、身振り手振りして何かを熱く語っている。

するとそこにひとりの少女が熊のぬいぐるみを抱えて、駐在所に入ってきた。そして、ずっと俺のことを見つめている。

「お嬢ちゃん、どうしたんだい。お母さんはどこにいるのかな」

俺は心配になって訊いてみた。その少女は俺の一人娘に瓜二つだった。思わず「由香里なのか」と訊きそうになったが、まさか自分の娘がこんなお洒落なドレスを着て、熊のぬいぐるみを持ってふらついているわけがない。少なくとも、そういう教育はしていない。

「由香里ちゃんのパパ？　英利、知ってるよ、由香里ちゃんのこと」

娘の知り合いにこんなお嬢様がいるのかと、少し驚いた。僕は椅子から立ち上がって腰を屈め、少女の目線に自分のそれを合わせた。

「由香里のお友達かな。エリちゃんっていうのかな。だけどな、英利ちゃん、お母さんがいないじゃないか。こんなところに独りでいちゃあ、危ないよ。とりあえずここに座って」

「英利にママ、いないよ。それよりね、由香里ちゃんがさっきね、どっか行っちゃったの。知らない人が連れてっちゃった」

聞き捨てならなかった。母親がいない、というのも気になったが、知らない人が連れて行ったということの方が気になった。知らない人が連れて行った――即ち誘拐されたということか。咄嗟に考えた

が、とにかく頭の中が混乱していて考えがまとまらなかった。
「ちょっと、詳しく聞かせてもらえるかな。憶えてる限りでいいんだけどね、その人たちが着ていたお洋服とか、顔とかを教えてくれないかな。あれ、ってことは、由香里と一緒に遊んでいたということかい？」
「そうだよ。お洋服はね、白いの着てた。おまわりさんがその下に着てるみたいなの。おズボンはおまわりさんが穿いてるのの黒いやつかなあ」
　ワイシャツにスラックスという出で立ちなのだろう。俺は混乱している頭の中を必死に整理して、英利の言うことをメモした。性別はどちらなのだろうか。この様子だと男か。そのように戸惑う俺の気持ちを汲んだように、英利は言った。「男の人だったよ」
「あのね、大きくて黒い眼鏡かけてた。身体もすごく大きかった」
「どこで攫われたんだい？　君も一緒に遊んでいたところだよね」
　僕が英利の小さな肩に手を置いたときだ。俺よりも先輩巡査の小内が巡視から帰って来た。
「お、佐久間、そのお嬢さんはどこの子供だ？」
「小内さん、俺の娘が誘拐されたかもしれない。この子が今知らせに来てくれたんです。どうしよう……」
　警察官のくせに、弱々しい一面を見せてしまった。とにもかくにも、英利の証言をメモした紙を見せて、犯人の特徴を言った。それを小内が読んでいる間に固定電話が鳴った。番号は表示されておらず、『公衆電話』とだけ示されていた。俺は頬を冷や汗が伝うのを感じた。
「……もしもし、港町交番ですが」
「佐久間貴彦だな？　貴様の娘はこちらで預かった。詳しくはファクスで確認せよ。以上だ」
「おいっ、ちょっと待てっ」
　俺がそう叫んだときにはもう電話は切れていた。ファクスとは言われたが、まだ届いていない。俺の額は汗でぬれていた。全身の力

が抜けるのがわかった。呆然と受話器を持ったまま机に手をついていた。すると、小内が声をかけてきた。
「ファクスが届いたけど、今の、犯人か」
俺はファクス用紙をひったくるようにして小内から取り上げると、それを読んだ。
「あっ、すみません、ちょっとみせてください。今のが犯人だと思います。これって今送られてきたものですか」
小内は頷くと、俺から目を逸らして英利と何か話し始めた。俺はそのファクスを見て目を剥いた。
『佐久間由香里を預かった。彼女を助けたければ、本日正午までに浜町海岸のプレハブのところまで来い。その際身代金として、現金三百万円を持ってくることを条件とする。その入れ物はシルバーのアタッシュケースに特定する。この事件を外部に漏らすことを許さない。唯一漏らしても良いのは、本日港町交番に駐在している小内健太巡査のみだ。警察、知り合い、身内などに漏らしたらどうなるかは容易に想像がつくだろう。漏らしたら彼女の命はない。
では、本日正午にプレハブの裏で取引を行う。頼んだ』
「何を考えてやがる、こいつ」
俺は思わず呟いた。馬鹿馬鹿しい真似をして、本来の目的は金なのか。そして、俺のその表情を見て小内は俺に訊いてきた。
「どうすんだ」
「行くしかないでしょう。でも、現金三百万って俺の手元にはないですし、銀行まで行って下ろさないとないですし、どうしよう……」
「由香里ちゃんのパパ、お願い、由香里ちゃんを助けて。おまわりさんでしょう？　お金が要るの？　それならパパに電話するよ。すぐ用意できるよ」
やはり金持ちの家庭だったのか、と僕は改めて感じた。だが、殆ど無関係の子供を誘拐事件に巻き込むわけにはいかない。
「これはね、おまわりさんの娘のことだから、英利ちゃんはいいんだ。君を巻き込むわけにはいかないんだよ。これもおまわりさんの

お仕事なんだ」
　そうは言ったものの、正午まであと一時間もない。銀行で金を下ろさなければ手元にはないし、それにもまた時間がかかる。俺は迷った末に小内に協力を頼んだ。
「小内さん、俺が金を下ろして向こうに着くまでの間、もし犯人から何かあったらこちらで受け答えしてもらってもいいですか。それと、英利ちゃんをお願いします。今すぐ行って来ます。お願いします」
「任せておけ。絶対引き下がっちゃだめだぞ。少し脅されたからって、おまえは警官だ。そんなんでビビっていたらちゃんとした刑事にはなれない。それに娘さんの命も懸かっているんだ。しっかりな」
「ありがとうございます、わかりました。行って来ます」
　俺はポケットに携帯電話を入れて、キーを車に差し込んだ。

第二章　『無事』

俺は駐在所を飛び出したはいいが、そのあとどうなるかまでは考えていなかった。銀行まではまだ少しある。思い切り渋滞に嵌った俺の車は、五分経っても動いたって三センチだ。今娘はどうなっているのだろう。何をされている？　飯は食ったのか？　腹は減ってないか？　痛いことされてないか？　車が動かなければ動かないほど、不安は募っていった。俺は腕時計に視線を落とした。もう既に十一時二三分だ。車、動いてくれないか、頼む――それしか今は願えない。

大丈夫だ、あいつは強い――俺は自分に言い聞かせた。必ず元気で帰ってくる、大丈夫だ。もはや自分を救う言葉はこれしかなかった。

少し先に銀行が見えた。俺は傍らに車を停めて銀行まで走ることを決意した。そのほうが早い。いつまでも車内で涼んではいられないのだ。昔から憧れていたヒーローは、こういうときに頭を使うのだ。全速力で走って、銀行へ入った。

思いのほか、銀行内は空いており、金を下ろすことは容易にできた。だが三百万というと、手続きをせねばならない大金だ。面倒だったがその手続きを済ませ、再び車に乗り込んだ。今までにこれほどの大金を手にしたことがなかったので、少し緊張してもいた。

車に乗ったまではよかった。今の時刻は十一時三二分だ。あと三十分をきった。すると、携帯電話が着信を告げた。小内からかもしれないと思い、渋滞中で全く動かない車内で携帯電話を開いた。

「もしもし、どうか……」

「今どこにいる？　あと三十分をきったが、まだこちらに到着していないようだな」

俺は顔をしかめた。先ほど駐在所で聞いた声と同じだった。

「おまえ、さっきの誘拐犯か。人質は俺の娘だと言ったな。身代金

はちゃんと用意した。頼む、解放してくれないか」
「無駄だな。解放することはできない。こちらの指示に従ってもらう。今から佐久間由香里の声を聞かせる。一分間だけ時間をやるから、言いたいことを言っておけ。万が一に備えてだ」
「万が一って、俺がそっちに行って、金を渡したら解放してくれるんじゃないのか」
「俺がそこまで優男だと思うか。それだけで娘を返すことはない。とにかく言うことをきけ」
　そして俺が黙っていると、娘の声が聞こえた。
「パパ、パパっ」
「由香里っ？　おまえ、怪我してないか？　飯は食ったか？」
　我ながらこの貴重な時間に何をくだらないことを聞いている、と思ったが、それが一番心配していたことだった。
「うん。由香里、英利ちゃんと遊んでたらね、知らないおじちゃんが由香里のこと連れてっちゃったの。でもね、由香里元気だよ。おじちゃん悪いことしてないよ。由香里とも遊んでくれたよ。だから、心配しないで」
　俺は泣きそうになった。これは犯人に言わされていることなのかもしれないが、それでも声を震わせずにちゃんと喋っている。こんなにこいつは強かったのか、と俺は娘の成長もろくに感じてやれなかったことに腹が立った。
「そうか。パパ、助けに行くからな。頑張れよ、おまえは強いからな。これぐらいのことじゃ、くじけないだろ？　頑張れ、俺が、パパが助けに行くから、それまで頑張るんだぞ」
「うん、由香里、知ってたよ、パパが来てくれるって。おじちゃんがパパに電話してたもん。大丈夫だよ、パパはおまわりさんでしょう？　かっこいいところみせてね。あっ」
　電話が取り上げられたのだと、すぐにわかった。ストラップが携帯電話本体に当たる音がしたからだ。
「一分だ。最後の声になるかは、貴様次第だ。あと三十分をきった

ことを報告するとともに、娘の声をきかせた。これでこちらとしてはもうすることはない。あとは貴様を待つだけだ」
「おいっ、ちょっと、俺からも聞きたいことがある。なぜ俺の携帯電話の番号が分かった？」
「貴様の知り合いだからだ。それでは失礼する」
「まだっ……」
まだ聞きたいことは山のようにあったが、仕方がない。携帯を閉じて、前を向き直った。

浜町海岸に到着したのは正午四分前だった。プレハブを探して歩き回っていると、岬のあるほうにいくつか古びたプレハブが建っていた。どれももう使われていないいないらしく、潮風にあたって錆びていた。
そこまで行くと、携帯電話が鳴った。公衆電話からだ。またか、と呟くと携帯をあけた。
「三つ目のプレハブまで歩け。正午前にここに来たことを認める。よって、佐久間由香里の命を奪うことはやめよう。だが、彼女とともに、俺もここにいるわけではない。即ち、金を三番目のプレハブの裏に置いたらその場を即座に立ち退けということだ。あまり探し回っているような行為が見受けられた場合、こちらでそれ相応の対応をすることになる。頼むぞ。こちらもそれは本意ではない。ではまたどこかで会おう」
シルバーのアタッシュケースを片手に、安堵のため息をついた。ひとまず命の危険は免れた。三つ目のプレハブを数えながら歩くと、それは一番古びたものだった。俺はアタッシュケースをプレハブの裏に置くと、周りを見回しながら車のあるほうへ向かっていった。しかし、すぐに呼び止められた。
「あれ、佐久間じゃん。どうした、こんなところにこんな物置いて」
「あっ、触るなっ。触っちゃ駄目だ……。絶対に触るなよ」
声をかけてきたのは、警察学校で同期だった塩原だ。少し前まで

は俺と同じような制服を着ていたのに、今はもう背広姿だ。きっちりと着こなされた背広は、よく似合っている。そして、俺は恐る恐る訊いた。
「……なんでおまえ、ここにいるんだ」
「なんでって、ここの警察署に配属されたからだよ。すぐそこにあるだろ、浜町署。っつーか、おまえこそ何こそこそやってんだ。最近この海岸で不審者が出没すると聞いて、俺らもここらへん張り込んでるんだが、まさかおまえか？」
「そんなわけねえだろ、まさか。俺はあれだよ、ちょっと用事があって、ここにきただけだ」
完全に怪しかった。だが、外部に漏らすわけにはいかない。現に先ほどの犯人はこの近隣で見張っているに違いない。それでなければ、俺がここに来たことを確認することは不可能だ。それか、複数犯の可能性もある。一人が近辺で見張り、もう一方は監禁された少女の見張り役だ。その可能性も無きにしも非ずだ。
「そのアタッシュケースは？」
「なんでもねえって、言ってるだろっ。しつこいぜ、おまえ」
「ふうん、まあいいや。じゃ、駐在任務お疲れ様ですっ。頑張ってください」
ふざけて塩原は敬礼してみせた。制服を着ているからといって、敬礼をされることでもない。そして彼は自前のバイクに乗ってどこかへ行った。ひとまず俺は安心すると、車に乗った。疲れが一気に出た気がした。すると、携帯がまたしても鳴った。
「おいっ、おまえどこにいるんだっ」
「何だおまえ、先輩巡査に向かっておまえとはいい度胸だな。それはそうと、どうだった？　間に合ったか」
俺は心臓が止まりそうになった。ちゃんと着信のモニタを見なければ、と自分自身に言った。
「なんとか、終わりました。無事に」
「そうか。英利ちゃんも大丈夫だが、この子の親はどこだろうな」

「訊いても答えてくれないんですよ。とりあえずそこで預かっていてください。俺もすぐ帰ります」
そして携帯をきると、再び電話がかかってきた。今度はちゃんとモニタを見た。公衆電話からだった。
「もしもし」
「確かに金は受け取った。ご苦労だった。またこちらから指示する」
再び電話は切れる。今、この船場を何か車らしいものは通ったか？　通ったはずがない。今自分は外に目を向けていたから、それは確かだ。不信感を抱きながらも、浜町海岸を去った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2152ba/

パパ、まってるから

2012年1月5日18時51分発行